



となん

【学校経営目標】

【目指す生徒像】

よりよい未来の創造と自己実現を目指し
学び活動する生徒の育成

【学校教育目標】

[知] 自ら学ぶ意欲を持つ生徒

[徳] 豊かな心を持つ生徒

[体] 健康でねばり強い生徒



さきやまようしょう

発行者：校長 崎山 用彰

☆下中だより「となん」は、
学校HPから閲覧可能→



6/18(水) 平和学習会

未来を創る君たちへ ～戦時中の子どもたち～

6/18(水)の5校時、「平和学習会」を行いました。講師は宮古島市博物館の学芸員、寺崎香織さんを招き、みだしの「未来を創る君たちへ～戦時中の子どもたち～」と題して行いました。



まず、「慰霊の日とは?」「沖縄戦後何年?」などの問いから、平和学習を行う意義について考えました。

次に、「戦時中の下地地区はどうだったか」アメリカ軍撮影の精度の高い航空写真から3つの飛行場や下地地区の様子を見てました。

そしてサブタイトルにもある「戦時中の子どもたち」については、民間人の卒業アルバム画像をもとに、「学校は軍に世襲されたこと」「学徒隊を編成し戦争に加わったこと」など、身近に戦争があった事実を目の当たりにしました。

最後に、寺崎さんが昨年も皆さんに聞いた「今は平和?」との問いに対し、「平和」と反応したのは50%でした。理由として「美味しいご飯が食べられる」「多くの人が笑顔でいられる」「笑って暮らせる」ことを挙げていました。次に「10年後は平和だと思う?」に対し、平和だと反応した生徒が15%もいませんでした。これには寺崎さんも、「昨年とは逆の反応ですね」と驚愕していました。このことから「10年後の平和を築いていくため」私たちができることを考え、行動に移していくことの必要性を痛感しました。そして生徒を代表して、お礼のことばを述べてくれた川満晴さん(3A)は、「講話で印象に残ったことは、主に女性が鋏や鋤などを持ち手作業で、わずか4ヶ月で飛行場を建設したこ

と、宮古島に3カ所あった飛行場のうち、海軍飛行場が現在の宮古空港だということを知った。」と述べていました。

右の画像は、台湾交流室での展示の様子です(皆さんは見学しましたか)。

また、昨日の「慰霊の日」は、皆さんどのように過ごしましたか?知っての通り「戦後80年」という節目を迎えました。次の世



代に語り継いでいくことも含め、沖縄戦の事実から目を背けず、どう向き合っていくか、これからも共に考えていきましょう……。

転入生「フレイリー・グレース・まるこさん」の自己紹介(日本語訳)



今回は English で紹介したみだしのことについて、今回は日本語訳を掲載します。

みなさんこんにちは!

私はフレイリー・グレース・マルコです。友だちは私のことを「まるこ」や「まるちゃん」と呼んでいます。私の誕生日は2月1日です。

好きなものは友だち、本(特にファンタジーが好きです)、音楽(特にタイラー・ザ・クリエイターが好きです。知ってますか?)そして私の家族が大好きです。でも、学校の宿題はあまり好きではありません。

日本に来てみて、私の国と日本の間にはいくつかの違いがあることに気づきました。例えば、「給食」という学校のお昼ご飯があることです。アメリカでは自分のランチを持って行くことが多いので、とても興味深いなと思いました。

そして、クラスには自分の席が決められています。アメリカでは、毎日自分の席を選ぶことができます。学校の制服も面白いです。

皆さんとこれから良い思い出を作っていきたいです。

【お知らせ】◎「慰霊の日」は、どのように過ごしましたか?裏面に6/22(日)沖縄タイムスの記事を載せました。読んでくださいね。

島へ兵隊 食料が大変に

語れども 語れども

うまんちゅの 戦争体験

518

与儀一夫さん(88) 宮古島市下地出身



爆弾を数えた日々を振り返る
与儀一夫さん＝4日、宮古島市平良西里

しているが、第2次世界大戦と同じような構想しかない。団地で避難したら船は確実にやられるよ。

すごい音の爆弾

空襲が始まるまで、兵舎に近かった自宅は兵隊たちのたまり場になっていた。民家に行ったら何か食べられるから。粗びきにした小麦粉をゆでたものに砂糖をつけて出した。兵隊はみんな瘦せていたよ。

軍事物資と食料を交換する兵隊を、憲兵が取り締まっていた。泥濘する兵隊も多かった。憲兵の靴はびかびかに磨かれていたのに、一般兵の靴はかばかばに乾いていた。あれは履いて歩くだけでがをするんじゃないかな。

毎日爆を握るのが彼らの仕事だった。終戦後は誤って落ちそうになるくらい、あちこ

戦後 家族全員がマラリア

ちに抱られていた。

空襲が激しくなると、学校に行っても長く座っていることはなかった。授業を始めたら空襲警報が鳴って、壕に避難する。こればかりだった。

家から学校まで往復8分あったから、そのうち行かなくなった。交通機関があるわけもなく、先生も来られない状態だった。

ある年齢に達したら軍医として働かされて、残るのは年寄り子どもばかり。小学2年生だった僕は、何もやることがない。友達が遊びに来るわけじゃない。

警報より先に、見えない所から爆弾が飛んできた。すごい音だったけど、そのうち慣れてきた。陰に隠れて空を見ながら、爆弾が何個落ちたか数えて生活していた。

偵察機がいて、機銃掃射もあったから畑仕事はできなかった。夜も照明弾の上から爆撃があった。

小さな島に住むと同じく、兵隊が来て、米軍に島を包囲されたから、食料が大変だった。配給さえなかった。僕たち家族はイモを食べていた。食べられただけでも良かったと思う。

兄2人戦死の報

陸軍で中国に行った長男の

兄は戦後しばらくして帰ってきたが、次男と三男は海軍だったから、どこに行ったのかも分からなかった。2人とも戦死したと知らせが届くと、両親が泣き出していった。

戦争が終わってすぐに、家族全員がマラリアにかかった。アメリカが病気をまいたんじゃないかとも思った。元氣な者からお互いで看病し合った。高熱ほどきついものはない。どんどん瘦せていく。卵が一番のこちそうだった。治ってしばらくしたら、またかかる。何回かかったか分からない。

貧富の差がある限り戦争は避けられない。平和な世の中になつてほしいが、まだそういう時代は来ていない。非常に難しいことだが、それはあなたたちの時代で実現してほしい。

編集後記

戦後80年を迎え、戦時中に大勢が九州や台湾に疎開していた宮古島では、島に残った体験者が非常に少ない。与儀一夫さんはその貴重な一人だ。小学1・2年生の体験だったため目付などは思い出せないが、憲兵や一般兵の履いていた靴など細部が目につくように書いている。与儀さんは「殺し合わなければならぬのが人間だ」と淡々と話しながらも、平和の実現を次の世代に託した。

(宮古支局・笠山学)

11日曜日掲載